

(果樹—落葉果樹—栽培)

( 豊 前 一 果 樹 )  
( 生 環 — 化 学 — 作 物 栄 養 )

課題名	29 イチジクの生産安定技術の確立		分類	②			
	(3) イチジクの大玉果実生産のための窒素施用量						
試験研究年次	63~2年(完了)						
I 目的 イチジクの収穫期は3ヵ月の長期に及び、収穫初期の果実は大きい、次第に小玉化する、窒素の施用量が果実の肥大に及ぼす影響を検討して、大玉果実生産のための参考資料とする。							
II 試験方法							
1	試験場所	現地 糸島郡志摩町					
2	土壌条件	中粗粒褐色森林土					
3	供試品種	柘井ドーフィン、一文字整枝 10年生					
4	試験区	(kg/10a)					
試験区	年間施用量			時期別窒素施用割合(%)			
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	11月下旬	6月下旬	8月下旬	10月下旬
少肥	10	15	18	60	10	20	10
基準	15	15	18	60	10	20	10
多肥	20	15	18	60	10	20	10
注) リン酸は全量11月下旬、加里は11月下旬 60%、6月下旬 10%、8月下旬10%、10月下旬 20%施用した							
5	葉中窒素含有率	6月下旬は先端展開葉から3枚目を、その他は同5枚目を採取した					
6	試験規模	1区3樹2反復					
III 主要成果の概要							
窒素施用量は多くなるほど、葉中窒素含有率がやや高まり、新梢伸長量が多くなって、上位節に着生する果実の肥大は促進されるが、下位節の果実は着色が不良になり、糖度が低下して品質が劣る。果実肥大と品質向上の両面から、10アール当たり窒素施用量は基準通り15kg程度が適量であると考えられる。							
1	新梢長は、窒素施用量が多いと長くなる傾向がみられるが、展葉枚数の差は少ない。						
2	葉中窒素含有率は、窒素施用量が多くなるとやや高まるが、収穫が終わりに近づく10月になると差はなくなる。						
3	果実の大きさは、窒素施用量が少ないと収穫初期から小さくなる。						
4	果実品質は、9月中~下旬の下位節の果実では、窒素施用量が多いと着色が悪くなり、糖度が低下する。10月下旬の上位節の果実では、窒素施用量が多いと果実は大きくなり、着色及び糖度の影響はない。						

IV 主要成果の具体的データ

第1表 時期別新梢長及び葉数

(63~2年平均)

試験区	新梢長			新梢1本当たり葉数		
	6月下旬	7月下旬	8月下旬	6月下旬	7月下旬	8月下旬
	cm	cm	cm	枚	枚	枚
少肥	57	94	99	12.5	19.2	23.2
基準	55	85	103	12.2	18.5	23.1
多肥	63	95	115	12.8	19.6	24.5

第2表 果実の横径及び品質

(63~2年平均)

試験区	基部より3節目		11-15節		1果重		着色(カラ-チャート)		糖度	
	6月下旬	7月下旬	8月下旬	9月下旬	9月中-下旬	10月下旬	9月中-下旬	10月下旬	9月中-下旬	10月下旬
	mm	mm	mm	mm	g	g			%	%
少肥	14.9	36.4	39.1	35.8	58	60	4.3	4.3	14.2	14.6
基準	14.9	35.5	44.7	36.7	59	65	4.2	4.4	13.8	14.8
多肥	16.0	36.9	44.7	36.6	58	64	3.6	4.4	13.4	14.6

第3表 葉中窒素含有率

(63~1年平均)

試験区	6月下旬	8月下旬	9月下旬	10月下旬
	%	%	%	%
少肥	3.99	3.84	3.03	2.71
基準	3.89	3.90	3.21	2.86
多肥	3.86	4.04	3.16	2.84

V 成果の評価と取扱上の留意点

イチジクの大玉果実生産のための窒素施用量の指導資料となる。

VI 今後の研究上の問題点

追肥用に、有機質及び固形肥料等肥効の長期間持続する肥料の種類を検討する必要がある。

VII 資料名

- 1 63~2年度 福岡県農業総合試験場豊前分場果樹研究室成績書
- 2 63~2年度 福岡県農業総合試験場生産環境研究所化学部作物栄養研究室成績書